〔グローバルＣＯＥ〕採択

家族と子どもの社会情緒的発達
—縦断的デザインによる検討—
Family and Children's Socio-Emotional Development: Longitudinal Study.

研究代表者　本島　優子（D3）　　教員　明和　政子
研究分担者　川﨑　裕美（M2）　大槻　綾（M2）

〔研究目的〕

家族は、子どもにとって、もっとも身近で直接的な、重要な社会的文脈の場であり、子どもの健全な心理的発達を支えるうえで、非常に重要な役割を果たしていると考えられる。そこで本研究では、家族内の情緒的なやりとりの質や雰囲気について焦点を当て、家族の情緒的雰囲気が子どもの社会情緒的発達にどのように影響するのかについて、乳児を持つ家族を対象に縦断的検討を行うこととする。具体的には、生後 9 ヶ月における家族の情緒的雰囲気が、生後 18 ヶ月の子どものアタッチメント安定性や生後 30 ヶ月の子どもの内在化行動・外在化行動にどのように直接的な影響を及ぼすのか、また生後 9 ヶ月における家族の情緒的雰囲気が、生後 18 ヶ月における母親の抑うつを媒介として、子どものアタッチメント安定性や問題行動にどのように間接的に影響するのかについて検討を行いたいと考える。

〔研究経過〕

本研究は、07 年度のコロキアム研究（本島・石井・川﨑・大槻、2008）において行った家族と子どもの発達に関する研究をさらに発展的に追跡研究したものである。本研究のデータの一部についてはすでに昨年度の研究活動において調査実施済みであり、本年度は主に生後 30 ヶ月のデータについて新たに収集・分析を行ったことに注意されたい。本研究の研究協力者は 34 名の母親とその子ども 36 名（二卵性双生児 2 ケース含む）である。生後 9 ヶ月に Cassidy(1994)が作成した家族の情緒的雰囲気に関する質問紙を母親に回答してもらい、家族のポジティブな情緒的雰囲気およびネガティブな情緒的雰囲気の得点を算出した。そして、生後 18 ヶ月に調査者が家庭訪問をし、母子相互作用場面における子どもの行動について約 2 時間程度の自然観察を行った。訪問後、Waters(1995)のアタッチメント Q ソート法(AQS)を用いて、子どものアタッチメント安定

性得点を算出した。そして、生後 30 ヶ月に再度家庭訪問を行い、子どもの情緒的・行動的問題に関して、Achenbach（1992）の「Child Behavior Checklist：CBCL」の質問紙を用いて、母親に評定を求めた。CBCL の下位尺度のうち、子どもの内在化行動（不安／抑うつ・引きこもり）と外在化行動（攻撃行動・破壊行動）に関して得点を算出した。そして、生後 9 ヶ月に母親が認知した家族の情緒的雰囲気が、生後 18 ヶ月における子どものアタッチメント安定性や生後 30 ヶ月における子どもの問題行動にどのように影響するのかについて分析を行った。

〔研究成果〕

本研究では、家族の情緒的雰囲気が子どもの社会情緒的発達、特にアタッチメント安定性や問題行動にどのように影響するかについて検討するため、家族の情緒的雰囲気が子どもの社会情緒的発達に直接的に影響を及ぼす経路と、家族の情緒的雰囲気が母親の抑うつを介して子どもの社会情緒的発達に間接的に影響を及ぼす経路を想定し、縦断的検討を行った。その結果、9 ヶ月時点で母親が認知した家族のポジティブな情緒的雰囲気、ネガティブな情緒的雰囲気いずれも、18 ヶ月時の子どものアタッチメント安定性や 30 ヶ月時の子どもの内在化行動、外在化行動と直接的に関連はしていなかった。しかし、9 ヶ月における家族のネガティブな情緒的雰囲気は、18 ヶ月時点での母親の抑うつに影響し、ひいては 18 ヶ月時の子どものアタッチメント安定性や 30 ヶ月時の子どもの内在化行動や外在化行動に影響しており、母親の抑うつが媒介的役割を果たしていることが確かめられた。すなわち、9 ヶ月に母親が認知した家族のネガティブな情緒的雰囲気が高いほど、18 ヶ月時点での母親の抑うつが高くなり、ひいては、母親の抑うつが高いほど、18 ヶ月時の子どものアタッチメント安定性が低かったり、30 ヶ月時の子どもの内在化行動や外在化行動が多かったという関連性が見出されたのである。これらの結果より、家族の情緒的雰囲気は、子どもの社会情緒的発達に直接的に影響はしないものの、母親の抑うつを介して、子どもの社会情緒的発達に間接的に影響を及ぼすことが確かめられたといえよう。特に、家族内において葛藤や不和、緊張状態などの否定的な雰囲気が強い場合、母親の抑うつが媒介となって、子どもの発達に否定的な影響を及ぼすことが認められた。旧来より、母親の抑うつは子どもの発達にさまざまな否定的影響を及ぼすことが広く知られており、本研究においても、母親の抑うつが高いほど、子どものアタッチメント安定性が低かったり、子どもの内在化行動や外在化行動が多かったりと、母親の抑うつが子どもの社会情緒的発達に阻害的に作用することが確かめられたといえる。今後は、媒介要因として、母親の抑うつ以外にも、母親の子どもに対する行動にも着目し、家族の情緒的雰囲気が母親の行動を媒介として子どもの社会情緒的発達にどのように影響しているのかについて実証的に検討を試みる必要があろう。